熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ
Quarterly magazine FOYER
2024 spring

020

つながる、ひろがる、あつまる
ほわいえ

FOYER

Special feature
劇場の未来を話そう

熊本県立劇場 文化事業
2024年度ラインアップ

令和5年度改修工事報告

日常に、劇場を。

Life with a Theater.

熊本県立劇場
KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

【企画・発行】
公益財団法人 熊本県立劇場
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】
株式会社 ジャム
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ　2024 spring　発行日：2024.3.20　※掲載内容は2.29現在のものです。

Special feature　劇場の未来を話そう

いつでも だれにでも 劇場は、 開かれている

あなたにとって、劇場ってどんな場所ですか？

左から
事業グループ 山﨑 拓哉
総務グループ 宮本 帆士魁
舞台技術グループ 金子 千佳子
施設サービスグループ 池島 茂伸

そんな問いを向けられたら、どう答えますか。ある人にとっては、好きな音楽を心ゆくまで堪能できる、日常からちょっと離れた特別な空間かもしれません。部活動の発表会のステージとして思い出の場所と答える人もいるでしょう。もしかしたら、公演を鑑賞する目的以外では足を踏み入れづらい場所と思っている人もいるかもしれません。劇場がどんな場所か、考えたことがない人だっていてもおかしくありません。

熊本県立劇場の運営を担うわたしたちは、いつもこの問いに向き合っています。どうすれば、もっと多くの人に来てもらえる劇場になれるのか。劇場の重たい扉を、もっと軽やかに開けてもらえるようにできるだろうか。これからちょっと先の未来に、どんな劇場の姿を描いていくのか。劇場の基本的な運営方針を立て、そのミッションに向かって、毎年さまざまな事業や取り組みを計画し、進めています。２０２２年に40周年を迎えた劇場の、これから先をどうしていくのか。劇場の未来を担う職員によるディスカッションをもとに、運営計画をご紹介します。

discuss the future of our theater

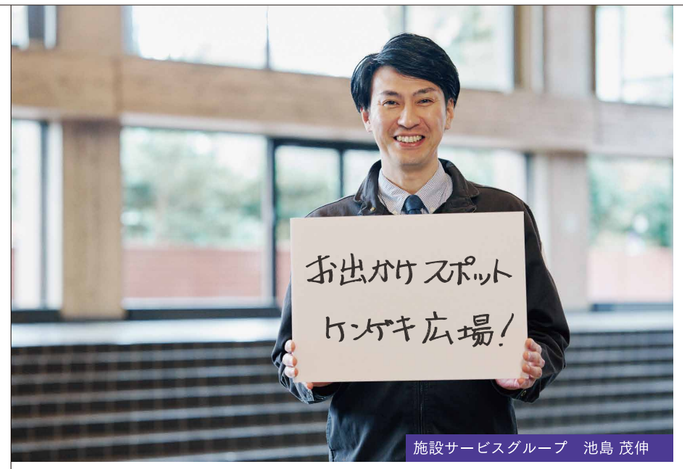
広場としての劇場

公演以外で来館する〝きっかけ〟づくり 新たな目的で集える劇場へ

これまでも、県立劇場は「誰もが気軽に文化芸術に触れ合え、人と人をつなぐ共生の広場」として、さまざまな事業に取り組んできました。その中で、8月に開催した「県劇盆踊り」は、今後も継続して注力する取り組みとなりました。２０１６年の熊本地震からの復興の第一歩として姜尚中館長の発案ではじまったこの事業は、コロナ禍で開催できなかった年もあったものの、県劇の夏の風物詩として、ご近所さんをはじめ、実に多くのお客様が集まる行事として定着しつつあります。この事業は、企画から運営まで、県立劇場の事業、施設サービス、舞台技術、総務の４つのグループが一丸となって取り組んできたものです。このグループの垣根を越えた横のつながりによって実現できたといっても過言ではありません。これからも、グループを横断した事業を中心に据えていきます。

山﨑（事業）　公演の鑑賞以外で気軽に劇場を利用してもらうための取り組みとして、「光庭文庫」という読書スペースをオープンします。劇場40年の歴史の中で収集した本から厳選して、演劇や音楽など、舞台芸術に関する本を中心にご紹介するスペースです。いつも置いておく定番の本とともに、公演に合わせた特別選書コーナーを設ける予定です。もちろん、ゆっくりとその場で読んでもらえるように施設サービスグループといっしょにレイアウトなど工夫して展開します。

事業グループ　山﨑 拓哉



施設サービスグループ　池島 茂伸

池島（施設サービス）　演劇、コンサート各ホールの部分利用やホワイエでの公演も増えてきたので、ホール以外でも劇場をすみずみまで利用できるような環境を整えていきます。新しく設置する「光庭文庫」とともに、エントランス、モールに作品を飾ることができる展示利用に力を入れていきます。公演開催時は多くの方が利用される劇場を、作品の発表の場として利用してもらいたいと考えています。

金子（舞台技術）　夏の「県劇盆踊り」は、企画を実際に形にして実行するまで、劇場のすべてのグループが知恵を出し合って、それぞれの役割を果たしてできる事業です。お客様にもこの参加型のイベントに加わって、その良さを味わってほしいと思います。

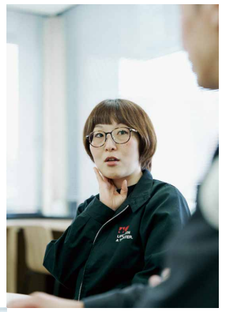
宮本（総務）　誰もが気軽に文化芸術を楽しむためには、「安心」が大事だと思います。利用しやすい施設の整備はもちろん、ｗｅｂサイトでは「やさしい日本語」を使った案内や多言語化にも対応していきます。どなたでも気軽に来館していただくためには、行く前の不安をどれだけ減らしていけるかが課題です。目標としては、行き慣れた劇場になることです。

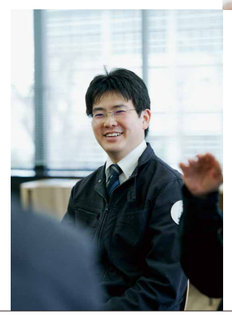
育てる劇場

観る人、実演する人、その活動を支える人、3者を育てる場としての役割

劇場という場所は、音楽や演劇などの鑑賞環境が整えられた最高の舞台です。その素晴らしい環境のなか、文化芸術を楽しむことができます。

劇場が持っている環境を活かすには、人材育成が重要です。県立劇場では、音楽、演劇などを観る人、実演する人、そしてその舞台活動を支える技術者・制作者の3者を育成する人材育成事業に力を入れています。これから先、未来の文化芸術を担う観る人、実演する人、そして活動を支える人の文化芸術に関わる人たち、特に若い世代の人たちを育てていくことを劇場のミッションとして、今後さらに注力していきます。





山崎（事業）　子どもたちに文化芸術の魅力を、まずは知ってもらうことを目的に、演劇仕立てのバックステージツアー「劇場探検隊」やダンスワークショップなどを定期的に開催する「けんげきキッズプログラム」をスタートします。舞台芸術への関心喚起のために鑑賞機会を提供するなど、取り組んでいく予定です。また、２００４年から継続している演奏家派遣アウトリーチ事業では、２０２４年から若手の演奏家３名を新規登録アーティストとして迎えます。

舞台技術グループ　金子 千佳子

池島（施設サービス）　舞台技術グループとともに取り組んできた、学生に向けた「バックステージツアー」は引き続き劇場に関心をもってもらうための事業として続けていきます。また、アーティストとともに動画の配信などで、熊本の文化芸術との接点を広げる活動を継続的に。広場として活用する作品展示も、継続性があるものに取り組み、広い意味での文化芸術の人材育成につなげていきたいです。

金子（舞台技術）　舞台技術者の人材不足は、熊本だけに限らず、全国でも深刻な問題です。しかも熊本には舞台技術の専門の学校がありません。教育の場としての劇場の役割は大きいと思います。施設サービスグループと取り組む「バックステージツアー」をはじめ、毎年開催している「舞台技術の基礎講座」、県内公立文化施設を対象とした研修会などを実施しています。まっさらな舞台からのものづくりを体験できる機会をつくっていきたいと考えています。

宮本（総務）　劇場の仕事、運営について知ってもらう機会として、小中高校生、大学生、専門学生など、インターンを受け入れています。インターンシップの期間はさまざまで、3カ月など長期の受け入れも可能です。また、熊本県公立文化施設協議会の会長館として、県内全域の舞台芸術の質の向上を図る研修を積極的に行っています。

総務グループ　宮本 帆士魁(ほしと)

熊本県立劇場 文化事業
2024年度ラインアップ

熊本県立劇場は、2023年11月から2024年3月まで約4カ月間の改修工事を経て、より快適で安全な劇場としてリニューアルオープンしました。

2024年度は主催事業もパワーアップ。「パーヴォ・ヤルヴィ指揮ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団」「佐渡裕指揮新日本フィルハーモニー交響楽団」「フロリアン・ゼレール家族三部作より「La Mère 母」など、話題の公演をラインアップしました。また、全国7都市の劇場による共同制作オペラ「ラ・ボエーム」は、2024年末で引退を表明している指揮者・井上道義が森山開次(演出)とともに放つ注目作品です。

今年度からスタートするのは「けんげきキッズプログラム」です。劇場はたくさんの「どきどき」や「わくわく」に出会える場所。これからの未来を担う子どもたちに文化芸術の魅力を伝え、豊かな想像力や表現力を育むことを目的とした新たなシリーズです。劇場をより身近に感じてもらえる、人気の3つの演目をご用意しました。

このほか、室内楽の人気シリーズ「ホワイエサロンコンサート」や、県内市町村のホールで開催する「ネットワーク事業」など、多彩な公演をお届けします。

2024年度ラインアップの一部をご紹介！

大和証券グループPresents　佐渡裕指揮 新日本フィルハーモニー交響楽団 with 角野隼斗(ピアノ)

5/22㊋
開演19:00
県立劇場 コンサートホール
【全席指定】
S席 8,000円
A席 7,000円
B席 6,000円

※25歳以下の方、障がいのある方は
3,000円引

新日本フィルハーモニー交響楽団 ©K.Miura

新音楽監督 佐渡裕が贈る新日本フィル白熱のチャイコフスキー
進化し続けるピアニスト 角野隼斗と待望の競演！！

出演／佐渡裕(指揮)
角野隼斗(ピアノ)
新日本フィルハーモニー交響楽団(管弦楽)

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調
チャイコフスキー：交響曲 第5 番 ホ短調

La Mère 母

6/8㊏
開演14:00
県立劇場 演劇ホール
【全席指定】
S席 7,000円
A席 5,000円
※25歳以下の方、障がいのある方は
S席 3,000円引き
A席 2,500円引き

世界中で高い評価を受ける劇作家フロリアン・ゼレール。
舞台から映画化もされた『父』・『息子』の出発点となった
『母』の日本初演。

出演／若村麻由美、岡本圭人、伊勢佳世、岡本健一

第66回熊本県芸術文化祭オープニングステージ『ひこばえ』

9/8㊐
開演14:00
県立劇場 演劇ホール
【一部指定】
指定席 3,000円
自由席 2,000円
※25歳以下の方、障がいのある方は
指定席 1,500円
自由席 1,000円

前田順康
©Takashi Okamoto

藤倉大
©Yuko Moriyama otocoto

日本を代表する太鼓芸能集団「鼓童」と、オーディションで選出した県内の太鼓奏者たちがエネルギーに充ちた熱いステージを披露します。イギリスを拠点に活動する現代作曲家・藤倉大と鼓童による2 曲の委嘱作品初演は必聴。

演出／前田順康(太鼓芸能集団 鼓童)
出演／太鼓芸能集団 鼓童、オーディション選出の太鼓奏者
藤倉大：新曲初演(公益財団法人熊本県立劇場委嘱作品)
太鼓芸能集団 鼓童：新曲初演
協力／熊本県太鼓連合、熊本県太鼓連盟、宇土雨乞い大太鼓保存会
制作協力／宇土市民会館、(株)北前船

全国共同制作オペラ プッチーニ歌劇『ラ・ボエーム』

10/19㊏
開演14:00
県立劇場 演劇ホール
【全席指定】
S席 12,000円
A席 10,000円
B席 8,000円
C席 6,000円
※25歳以下の方、障がいのある方は
3,000円引

井上道義
©Yuriko Takagi

森山開次
©Sadato shizuka

2024 年12 月で指揮活動の引退を公表している井上道義。
最後のオペラは、森山開次による新演出『ラ・ボエーム』。
これまで何度もタッグを組んできた二人が、
新たな『ラ・ボエーム』をお届けします。

指揮／井上道義
演出／森山開次(演出・振付・美術・衣裳)

パーヴォ・ヤルヴィ指揮　ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団

12/7㊏
開演13:00
県立劇場 コンサートホール
【全席指定】
S席12,000円
A席10,000円
B席8,000円
※25歳以下の方、障がいのある方は
3,000円引

パーヴォ・ヤルヴィ
©Gaëtan Bally

ラファウ・ブレハッチ
©Marco Borggreve

いまもっとも鮮烈な演奏で世界を驚かせる
パーヴォ＆ドイツ・カンマーフィル。
ピアノソロにブレハッチを迎え、最上の響きをお届けします。

出演／パーヴォ・ヤルヴィ(指揮)
ラファウ・ブレハッチ(ピアノ)
ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団(管弦楽)

けんげきキッズプログラム

①6/22㊏
②6/29㊏
2025年
③3/2㊐

①【全席指定】
おとな1,000円
こども500円
②午前の部一組500円
午後の部一人500円
③おとな1,000円
こども500円

小林顕作 ©石川純

①絵本のじかんだよ！(絵本の読み聞かせ)
出演: 小林顕作

②古家優里ダンスワークショップ
あかちゃんと保護者、小学生を対象にしたダンスワークショップ
講師：古家優里

③行くぜ！劇場探検隊2024
演劇仕立ての劇場バックステージツアー

ホワイエサロンコンサートシリーズ

①5/18㊏
②10/23㊌
2025年
③2/8㊏

県立劇場
コンサートホール ホワイエ
【全席自由】
各回3,000円
※25歳以下の方、
障がいのある方は、半額

熊本県立劇場40周年記念カルテット

今年度は3 回のコンサートを予定！
ホワイエに映る鮮やかな木々とともに、
彩り豊かな楽曲の数々をお楽しみください。

【出演】
①熊本県立劇場40 周年記念カルテット(弦楽四重奏)
②Ensemble Horizonte(ドイツの現代音楽アンサンブル)
③カルテット・スピリタス(サクソフォン四重奏)

市町村ネットワーク事業

県内各地で舞台芸術公演鑑賞の機会を提供するため、公演をプロデュースし、市町村ホールと共同で実施します。

演奏家派遣アウトリーチ事業

県内各地の学校やホールに演奏家を派遣し、生の演奏を間近で聴いたり、体験したりする機会を提供します。

各公演の詳細、および全ラインアップは、熊本県立劇場オフィシャルウェブサイトでご確認ください！

令和5年度改修工事報告

KENGEKI REPORT & INTERVIEW

時代を超えて愛される建築は、時代とともに変化していく

照明を整備することで、正面玄関の雰囲気が少し明るくなった

熊本県立劇場は、2023年11月13日から2024年3月15日までの4カ月の間、改修工事のために施設利用を停止していました。今回の工事は、中長期計画における中規模の改修にあたり、今後は2015年に策定した保全計画書をもとに熊本県、県立劇場、そして設計を担当する前川建築事務所の3者の協議によってメンテナンスを実行していく予定です。保全計画では、3年に一度細かな改修が予定されており、建物が持つ独特の空間性を重視しながら、ずっと愛されていく建築として継承していく方針です。

熊本県立劇場は、モダニズム建築の旗手として戦後の日本建築界を牽引してきた建築士、前川國男氏の最晩年作の建物として知られています。コンサートホール、演劇ホールと、ふたつの性格の異なる専用ホールを有し、西側の道路から東側にある駐車場をつなぐモールと呼ばれる空間がこのふたつのホールを音響的に分離し、空間的にゆとりのある設計となっています。長期にわたる適切な維持保全が評価され、2020年には、公益社団法人ロングライフビル推進協会のBELCA賞を受賞しました。

株式会社前川建築設計事務所
一級建築士 江川 徹

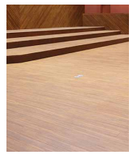
「変わらないね」との言葉が、なによりの褒め言葉

熊本県の方針によって、県立劇場は10年、20年単位での大規模な改修を行うのではなく、3年に一度の部分改修を計画に基づいて行っています。設計を担当する前川建築設計事務所の担当設計士、江川徹さんにとって、この保全計画は「管理者と細かなやりとりができ、お困りごとにも対応できるので、ずっと面倒を見ることができる良い関係性をつくることができる」というメリットがあるといいます。熊本県、管理者である県立劇場、設計士との3者でディスカッションを重ねていくことで、改修に向けて関係性を築くことができ、なにが最適解なのかを一丸となって追求することができるわけです。「利用される方たちに愛され、ずっと誇りに思ってもらえる建築を残していくお手伝いができれば、と常に考えています」という江川さんの言葉どおり、これまで受け継いできた県立劇場の建物が醸し出す〝空間性〟はそのままに、利便性や時代に合った改修を行っています。文化財のように建設当時のままの状態で保存していくのではなく、利用する人の、管理する人の身になった利便性を追求し、時代に合わせた機能を向上させることが改修工事の大きな目的でもあります。今回の改修工事では、照明のLED化が多く施されていますが、建物の空間性を損なわないよう、LEDにフィルターをかけるなど細やかな工夫がされています。江川さんにとって「あんまり変わっていないね」という言葉をもらうことこそが、設計士冥利につきるといいます。

令和5年度改修のポイント

今回の改修は、設備類の更新をメインに行いました。正面玄関の照明を整備し、以前は暗いと感じられていた外廻りが、ほんのりと明るく雰囲気が良くなっています。

- ●コンサートホール舞台機構（迫り）更新と舞台床研磨
- ●演劇ホール舞台照明更新
- ●ホール内の空調騒音の解消
- ●ピアノ庫や楽屋・控室前通路の個別空調増設
- ●空調自動制御システムの更新
- ●屋外汚水、雨水排水設備の更新
- ●非常用発電機の更新（屋外移設）
- ●蓄電池設備の更新
- ●音楽・演劇リハーサル室、和室の照明のLED化
- ●館内時計設備の更新
- ●電力（高圧）引込開閉器の更新
- ●大会議室の音響・照明設備の更新
- ●特殊照明設備のLED化
- ●外灯照明のLED化



コンサートホールのステージは、床面を研磨し、塗装を行いました。

大型の非常用発電機を搬入口そばに新たに移設しました。

屋外の照明器具を更新しました。

熊本県立図書館タイアップ企画

本の中にある劇場

熊本県立図書館と県立劇場のタイアップ企画として、2007年度から県立劇場の文化事業に関連する図書を「〇〇を楽しむブックリスト」としてご紹介しています。作曲家や演奏家のこと、楽器にまつわる話や演劇の原作本。さらにはスポーツ、科学に関する本も！そして、このコーナーでは、県立図書館職員おススメの一冊をご紹介します。ここでご紹介したおススメ本もブックリストの本も熊本県立図書館で読むことができますので、ぜひ足を運んでみてはいかがでしょうか。

若松 英輔 著
文藝春秋〈文春文庫〉2019年12月
〈単行本 2015年11月 ナナロク社刊〉

熊本県立図書館 情報支援課 主任主事
下田 美超〔しもだ みき〕

悲しみの秘義

日々の生活で、災害に遭遇した時、誰かを喪った時、そして時には大した理由もなく、深い悲しみがこみ上げてくることがあります。そんな時に深い悲しみの中にある誰か（もしくは自分）に一体どんな本を手渡したら良いのだろう？と思いを巡らせた時、ふと数年前からいわゆる〝積読（つんどく）〟になっていた、この本を開いてみようという気持ちになりました。この本は、名著の言葉を、著者自らがもがき、見つめながら綴ったエッセイをまとめた一冊です。本を読むこと、音楽を聴くこと、劇場に足を運ぶことは、この上なく楽しい。元気をもらうために、本を読む、音楽を聴く、という人も多いのではないでしょうか。ただ、そんな「楽しい」とは様子を異にする「癒し」の機能があることを私たちは失念してしまいがちです。深い悲しみに直面してはじめて感じられる、ある種凄みをもった言葉や音の力があります。本や音楽は孤独にそっと寄り添ってくれます。「楽しい」だけでは、どうにもならない気持ちを抱えてしまった時、思い出してください、悲しみに寄り添う言葉、音楽があることを。

あなたの楽器見せてください

ペティエールウィンドオーケストラ
岸本 正輝〔きしもと まさき〕

テナーサクソフォーン

ヤナギサワのT-WO37というサックスを使用しています。高校時代は親に買ってもらったヤマハのYTS-380を使用していました。こちらもクセがなく扱いやすい良い楽器なのですが、やはりプロの方々が使用している高級な楽器への憧れがあったのは事実です。就職を機に、より良い楽器を自分で買いたくなり、後輩の全国大会を観るために訪れた大阪の楽器店でこの楽器に出会いました。その後、かねてより親交のあった亀井政孝先生に選定していただいたものが今手元にある楽器です。クリアながらも音色に深みがあり、吹奏楽、ポップス、ジャズなどジャンルを問わず活躍出来る楽器です。

現在は高校のOBバンドを含め3団体ほど掛け持ちで活動しており、そのうちの一つの「Petiere Wind Orchestra」は2022年の4月に発足した比較的新しい楽団です。

3月27日に創団初となる定期演奏会を県立劇場で予定しており、良い演奏会にするべく団員一同気合を入れて準備しております。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

サクソフォーン
ヤナギサワ　T-WO37

岸本 正輝
〔きしもと まさき〕
ペティエールウィンドオーケストラ

県劇スタッフリレーコラム

施設サービスグループ
嶺 浩子〔みね ひろこ〕

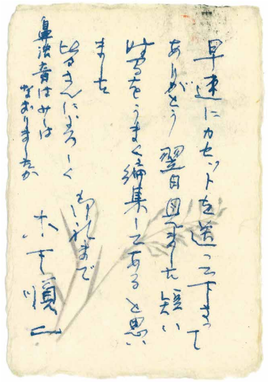
鼻濁音のおもいで

劇作家 木下順二さんとの思い出ばなし。

私の劇場での最初の仕事は、現代演劇のビッグイベント「日本劇作家大会2005熊本大会」だ。木下さんが顧問を務めた日本劇作家協会の企画・制作によるものだ。

大会の実行委員長は、当時の県立劇場館長、川本雄三さん。日本経済新聞社文化部の記者として多くの演劇人や文化人と親交を結び、木下さんとも親しかった。

ある日、川本さんと演劇談議に花を咲かせていた時、前職のテレビ局時代に、講演で来熊中の木下さんに取材した話になった。「きみは鼻濁音ができていないね」とインタビュー中に注意され落ち込んだこと。さらに、放映番組のビデオを送ったら直筆の礼状が届き、そこにも「鼻濁音は少しはなおりましたか」と書かれ完全に凹んでしまったこと。



私が川本さんに「木下さんの鼻濁音への執着は、熊本に転校してきた小学生時代に鼻にかかった鼻濁音の東京弁がおかしいとからかわれ、そのことが心の傷になり、鼻濁音ができない私に仕返しなさったのではないでしょうか」と伝えると、「その通り、その通り」と笑いながら納得してくださった。

そんな思い出のある川本さんが県立劇場を退任なさった晩秋に、木下さんが亡くなられた。ご本人の遺志により葬儀も追悼の会も行われなかった。故人と最も縁の深かった劇団民芸が追悼公演として「沖縄」を上演した。川本さんが、公演パンフレットに私のエピソードを取り上げ《木下順二さんと「鼻濁音の復讐」》という題で追悼文をだされた。送ってくださったパンフレットには、有名な俳優さんも鼻濁音咎めを受けたエピソードが語られていた。木下さんは、ことばに厳格で、なかでも、とりわけうるさかったのが鼻濁音だったと判明、私だけじゃなかったんだとなんだかほっとした。

今年の8月2日は木下順二さんの生誕110年。その年に思い出されたのは何かのご縁なのか、木下さんが拘られた鼻濁音を学びなおしてみよう。

編集後記

創刊から5年を迎えて

季刊誌ほわいえは創刊から5年を迎えました。

年4回の発行ですから、今号で計20回発行したことになります。以前は催事情報を掲載したインフォメーションのみを発行していました。それとは全く別物であるこの季刊誌ほわいえの創刊は私たちにとって一つの新しいチャレンジでした。

毎号の編集会議では、劇場に関わる様々なことを制作チームで議論しています。なかなかアイディアがまとまらず、スタッフ皆が沈黙…そんなこともよくあります。そんな時に私たちが立ち返るのは、「人」にフォーカスするということ。舞台芸術公演は、アーティスト、舞台や制作などのスタッフ、そして観客。一つの場所でこの多くの「人」の熱が合わさることによって大きな感動が生まれます。このそれぞれの「人」にフォーカスしてこそ、舞台芸術の真の素晴らしさや楽しさが伝わるんじゃないか。そんな思いで、創刊から今も変わらず主のテーマに据えています。

今後も取材をとおして、見て、聞いて、感じた「人」の想いを届けつつ、読者のみなさんがワクワクするような情報を掲載していけるように制作チーム一丸となって努力していきたいと思います。さて、すぐに次号の編集会議です。さあどうなることやら・・・次号もお楽しみに。（原田健太）